



～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol. 4 2008年5月号

- 科学絵本と環境教育のあいだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・溝田 浩二
- 食べること・食べられること・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- 児童図書の活用で読む力を・・・・・・・・・・・・・・・・・・今野 ゆき
- なつかしさいっぱいこの一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・今 真弓
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博

■ 科学絵本と環境教育のあいだ

いせひでこ作『ルリユールおじさん』（理論社）

溝田 浩二

昆虫や自然を題材とした環境教育に取り組んでいる私が、日頃いちばん大切にしていることは、ワクワク、ドキドキする心を失わないこと。しかし、雑務に忙殺される余裕のない生活を送っていると、そういう基本的なことすら忘れてしまいそうになることがあります。そんなとき、心の中をリセットしてくれるのが、摩訶不思議な自然の世界を、素直に、明るく、わかりやすく伝えてくれる科学絵本や子ども向けの図鑑です。今は本屋さんや図書館に行けば、楽しい科学絵本や図鑑が溢れていますから、私自身はもちろんのこと、最近の子どもたちは本当に幸せだと思います。

ところが、科学絵本や図鑑の充実ぶりとは裏腹に、子どもたちの理科離れの傾向はむしろ加速しています。昆虫少年、科学少年は、身近な自然や虫たちが減っていく以上の速度で、絶滅へと向かっているかのようです。子どもたちが自然や虫を嫌いになってしまったわけでは、決してありません。少なくとも、私が関わった自然観察会に参加した子どもたちは、みんな、虫や自然と戯れることが大好きでしたから。残念なことに、忙しい現代社会は、そんな少年・少女の興味や関心の継続すら許してくれません。子どもたちは「自然に関心を抱く」という通過儀礼を経ないまま、興味や関心はどこかに置き忘れて“オトナ”になるのです。虫を飼うのが好き、星を眺めるのが好き、花を育てるのが好き、石を集めるのが好き…といった類の子どもを本当に大切に育てていかなければ、どんなに優れた科学絵本がつくられたとしても、まったく意味がないと思います。

丁度そんなことを漠然と考えているときに会った絵本が、『ルリユールおじさん』（いせひでこ作・理論社）。植物図鑑がぼろぼろになるまで使い込むほど樹木のことを大好きな少女・ソフィーと、彼女の大切な植物図鑑を熟練の手仕事で美しく甦らせてくれる老人・ルリユール（製本職人）との心温まる交流を描いた物語です。物語は、「おじさんのつくってくれた本は、二度とこわれることはなかった。そして私は、植物学の研究者になった。」というフレーズで終わります。ここで重要なのは、ソフィーは、本が好きだから植物に興味を持ったのではなく、植物が好きだからこそ（知的好奇心を満たしてくれる）本も愛するようになったということ。すなわち、子どもの探求心や知的好奇心を育むには、すばらしい科学絵本や図鑑は必要条件ではあっても、十分条件ではないことを示しています。絵本を与える以前に、子どもたちに体験させておきたいことはあまりにも多いように思われます。



（環境教育実践センター）

■ 食べること・食べられること

藤田 博

食べるとは、食べられるものと食べられないものを区別する、それによって食べられるものを選び出す行為です。そこでは同時に、食べられないものと食べることはできても食べないものの区分けもなされています。前者が、物理的区分け(石は食べられないといった)であるのに対して、後者は、文化的区分け(ある村にあって、祭日には食べてはいけない、逆に祭日にだけ食べていいとされてきたもの)です。食べるとは、周囲にある「物」から「食べられるもの」を、「食べられるもの」から「食べもの」を分離する作業と言えるのです。そこでは、外なるものを内に入れるに当たって、入れていいものと入れてはいけないものの区別が常に意識されている、内と外との境が問われているのです。

外なるものを内へと入れる「食べる」ことに、境目としての口が関わるのは当然です。大きなもの、大きな口を持った大きなものが、小さなもの、小さな口を持った小さなものを腹の中へ取り込みます。小さなものでも、大きな相手を小さくすれば取り込むことは可能となります。自分をどう大きくし、相手をどう小さくするか、それによって物理的大小を引っくり返す力が生まれるのです。

レオ・レオニ『スイミー』(好学社)では、小さな魚のスイミーが仲間を集めて、大きな魚に見せかけます。知恵を働かせることで大きな魚に飲み込まれないようにする、更にはやっつける。それを可能にする小さなものは、大きなもの以上の力を持っているということなのです。宮西達也『はらぺこおおかみとぶたのまち』(すずき出版)も同じです。「ぶたのまち」の食堂のメニューには「おおかみラーメン」に「おおかみしゅうまい」が、本屋の店先には「おおかみをおいしくたべるほうほう」に「おおかみをかんたんにつかまえるほん」が並べられているといった具合です。知恵を使って、強い大きな口を持ったおおかみに恐怖心を与え、食べられないようにする、やっつけてしまうという意味からは、逆に食べてしまうのです。



ありこのありこが、かまきりのきりおに飲まれ、そのあとかまきりが、むくどりのむくすけに飲まれ、そのあとかまきりとむくどりがやまねこのみゆうに飲まれ、そのありとかまきりとむくどりとやまねこが、くまのくまきちに飲まれます。これが石井桃子『ありこのおつかい』(福音館書店)の世界です。その一つ一つが同心円状に描き出されることによって、飲み込み、飲み込まれるが一目でわかる形になっています。大きなくまが飲み込んだその後で、順にはき出されるのは言うまでもありません。

小さなものが大きなものに順に飲み込まれる、その大きなものを最初の小さなものが飲み込むとすれば、瀬田貞二『おなかのかわ』(福音館書店)や、うえののりこ『ぞうのボタン』(富山房)といった、驚きを伴った大・小の反転へとつながることも見えています。

榎ひろし『くいしんぼうのあおむしくん』(福音館書店)では、あおむしくんが帽子を飲み込み、パンを飲み込み、チョコレートを飲み込み、…まさおのパパとママを飲み込みと、次々飲み込んでいきます。最後には、まさおまで飲み込んでしまうのです。しかし、まさおの飲み込みはそれまでのものとは意味を異にしています。まさお一人ではさびしい、かわいそうと思ったから飲み込んだ、友だちだから飲み込んだのです。「そらと おなじいろをした へんなむしが、まさおの ぼうしを たべていました。」で始まり、「そらは あおく あおく すきとおった あおむしくんの おなかのなかのいろでした。」で終わるこの絵本は、すべてまさおの夢の中のできごとであることが暗示されています。とすれば、まさおを飲み込んだあおむしくんはまさおに飲み込まれていたことにもなるのです。



少年が橋を渡りながら落としたチョコレート、その小さなかけらを魚が食べます。もう一度食べたいと思い続けながら魚は死んでしまいます。それから長い年月が経ち、「きがつくとぼくは少年だった チョコレートのすきな少年だった」のです。その少年が落としたチョコレートのかげらを魚が食べる…。みやざきひろかず『チョコレートをたべたさかな』(ブックローン出版)は、飲み込み、飲み込まれるの関係から作り出されるエンドレスの世界、飲み込み、飲み込まれるが無限に連なるエンドレス特有の奇妙な感覚に襲われるのです。

※「スイミー」レオ・レオニ作・絵／谷川俊太郎訳／好学社

※「ありこのおつかい」石井桃子作／中川宗弥絵／福音館書店

※「くいしんぼうのあおむしくん」榎ひろし作／前川欣三画／福音館書店

(英語教育講座)

■ 児童図書の活用で読む力を

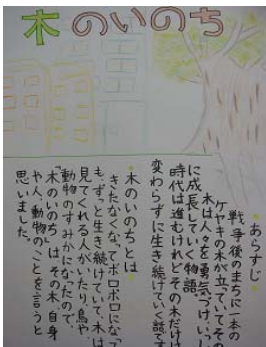
今野 ゆき

6年生の国語の授業で立松和平氏の「海のいのち」(6年国語下 東京書籍)の学習を行った。海に生まれた少年太一が、父や恩師の死を乗り越えて、村一番の漁師に成長する姿を描いた作品である。作品の中には「海のめぐみ」「…ここはおまへの海だ。」「…ぼくも海で生きられます。」「とうとう父の海にやってきたのだ。」「大魚はこの海のいのちだと思えた。」というように、海に関わる叙述が多く用いられている。そのため、それらの叙述から登場人物の海に対する考え方を読み取ることができるようになってきている。さらに、海に生まれた少年太一や、太一の憧れであるぐり漁師である父、太一が弟子入りをした一本釣りの漁師の与吉じいさなどの様々な人物の設定や「海のいのち」という象徴的な題名により、読み手は多様な視点で作品を読み取ることができるようになってきている。



そこで、太一の生き方や心情を表現や叙述と関連付けながら読み取る力を身につけさせるとともに、その読み方を用いて他の作品を読む力も高めたいと考え、次のように単元を構成した。

- ①「海のいのち」の作品の叙述から、登場人物の海に対する考え方を読み取る。
- ②立松和平氏の同じテーマで描かれた他の作品を読み、各作品について話し合う。



「海のいのち」の作品を通して、登場人物の海に対する考え方を読み取り、「海のいのち」の意味について話しあった後、立松和平氏の「いのちシリーズ」の作品を読む時間を設けた。初めに 全員で「山のいのち」を読み、「山のいのちとは何か」を話し合った。その中で、山のいのちについて、「海のいのちと同じく、山に生きる全ての生き物と、その生き物たちが住む山全体も、一つのいのちとして考えているのだと思った。」「山のいのちとは、山そのものだけでなく、山で生きている動物や植物、人間も含んでいるのではないか。」という意見が出された。子どもたちは、「海のいのち」で学習した時のように、登場人物の発言や題目に着目しながら、登場人物の山に対する考え方や「山のいのち」の意味について話し合うことができた。

その次の時間には、立松和平氏の「川のいのち」「田んぼのいのち」「街のいのち」を紹介し、個人で関心のある作品を読んで、あらすじとその題名の意味についてポスターにまとめる活動を行った。子どもたちは、これまで学習してきたとおり、登場人物の発言や題名に着目して読み取りを行い、ポスターにまとめることができた。

小学6年生になると、読書の時間には、長編の作品を読む子どもが多く、絵本仕立ての作品を読む子どもはあまり見られない。しかし、同じテーマで描かれた作品を用いて学習したことで、子どもたちは新鮮味を感じながら、教科書の中で学んだ作品の読み方を絵本仕立ての作品でも用いたようであった。



※「海のいのち」立松和平作／伊勢英子絵／ポプラ社

(附属小学校教諭)

■ なつかしさいっぱいのこの一冊

レオ・レオニ作・谷川俊太郎訳『アレクサンダとぜんまいねずみ』（好学社）

今 真弓

小学校2年生の国語の教科書に載っていたこの絵本を附属図書館で見つけ、なつかしさのあまり手に取りました。

壁の下の穴に棲むねずみのアレクサンダは、ぜんまい仕掛けで動くねずみのウイリーと出会い、友達になります。子どもたちからちやほやされるウイリーに、アレクサンダはうらやましさを覚えます。魔法を使うとかげの話をもウイリーから聞いたアレクサンダ、自分もぜんまいねずみにして欲しいとかげに頼むのです。ぜんまいねずみになるのに必要なのは、満月の夜に「むらさきのこいし」を持ってくることでした。アレクサンダは懸命に探し回ります。ところが、ある日、突然、ウイリーがいなくなっていました。「古いおもちゃ」として、積み木や壊れた人形と一緒に箱の中に捨てられていたのです。その時、アレクサンダの目に入ったものがありました。「むらさきのこいし」です。

ぜんまいねずみになりたいと必死だったアレクサンダが、「とかげよとかげ、ウイリーをぼくみたいなねずみにかえてくれる？」と、まったく逆の願いをとかげに言ったのはどうしてだったのでしょうか。小学生のときに考えたその問いかけへの答えに、今ようやく気づくことができました。本当の幸せとは何かということにです。

（英語コミュニケーションコース2年）



■ 新刊紹介

岩城範枝・文／片山 健・絵『木の実のけんか』（福音館書店）

どの花よりも先に満開になった大きな桜の木を見るために、向こうの山からタチバナ一族がやって来ます。ダイダイ、クネンボ（九年母）、ユズ、ブシュカン（仏手柑）、ブンタン、ミカン、キンカンの面々です。「いつもとおなじお酒でも、桜の下だと、かくべつに うまい」と興が乗ってきたところに、長年、この山に住むクリの実が、「ほかの山からきたくせに」と文句をつけます。タチバナ一族からひどい目にあわされたクリは、仕返しのため、カキ、ナシ、ウメ、ザクロ、ナツメ、モモの木の実一族を引き連れて押しかけ、双方入り乱れてのけんかが始まります。すると、花あらしが舞い、タチバナ一族も木の実一族も吹き飛ばされ、見えなくなってしまう。「木の实たちがいなくなると、風はやんだ。そして、なにごともしなかったように また、しずかに 桜が咲いていた」のです。



狂言「菓争（このみあらそい）」を基にしたこの絵本を、あるいは狂言そのものを、満開の桜の下での人間のつまらない争いを擬人化して描いたものと理解するか、満開の桜になくってはならないものと理解するか、解釈は分かれます。悪役とされ、狂言にあっては武悪の面をつけるクリが、「その歌ではないわ。よくききなされ。」と言って、「よしの山 たがうえそめし桜だに 数さきそむる 花のはじめぞ」と古歌を披露するなど、手順を踏んだ「儀式」となっていることから、酔っ払い同士のけんかでないのはわかります。ここにあるのは、小正月の行事などとして広く見られる叩き合い、模擬合戦と考えられるのです。叩き合うそこでの音が大きければ大きいほど、強ければ強いほど良しとされるのは、それが豊穡をもたらすものと信じられているからです。そう考えることで、クリに一斉に打ちかかり、扇で打ち据えるといったことも合点がいくというものです。敵も味方も消え失せたのは、桜の精が懲罰としてそうしたのではない、叩くということを伴う様式化された笑いのその後、全山が桜に染まるということなのです。

（藤田 博）

発行：宮城教育大学附属図書館